マンガで学ぶ予防接種

～染子先生のおはなし～

その②
肺炎球菌ってなあに？

～小児用の肺炎球菌ワクチンについて～

国立感染症研究所 感染症疫学センター

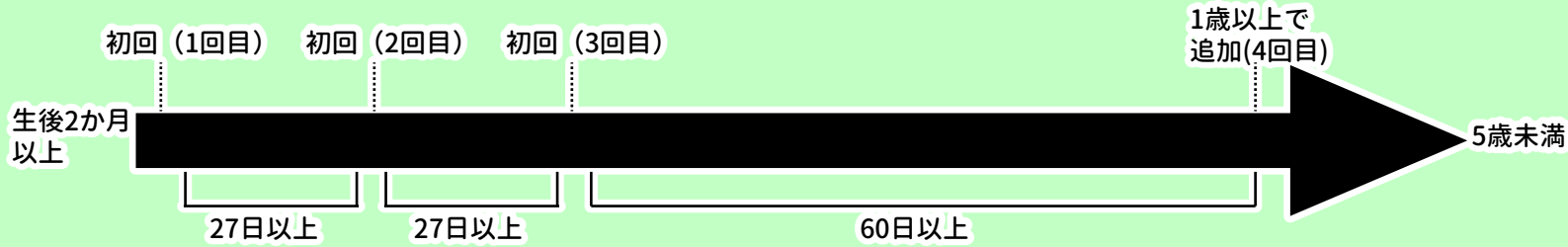
肺炎球菌は子どもの細菌感染症の、二大原因のひとつです。
肺炎球菌が起こす病気には髄膜炎のほかに、菌血症(血液の中に菌が入りこんだ状態)、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎などが挙げられます。ワクチン導入前は5歳未満人口10万人あたり2.8人前後が肺炎球菌による髄膜炎にかかっていました。2010年にワクチンが導入されたことにより、2013年には5歳未満人口10万人あたり1.1人まで減少しています(厚労科研神谷・庵原・菅ら)。

小児用肺炎球菌ワクチンは2010年に7価ワクチンとして接種が始まり、2013年より13価ワクチンに切り替わりました。
現在は100か国以上の国々で使用されています。
多くの国から、ワクチン接種の効果で肺炎球菌による髄膜炎や菌血症などの重篤な肺炎球菌感染症が減少していることが報告されています。

標準的な接種のしかた

〔接種年齢〕　生後2か月以上5歳未満（初回接種開始が生後2か月以上7か月未満の場合）

〔接種間隔・回数〕　初回はそれぞれ27日以上あけて3回、追加は初回終了後60日以上あけて1歳以上で1回（合計4回）。最初の3回は1歳になるまでに終了させ、1歳以降に1回追加。いずれも1回に0.5mLを注射します。



初めて接種を開始する月齢が生後 7 か月を超えてしまった場合、あるいは 1 歳以上 2 歳未満の場合、2 歳以上 5 歳未満の場合は、それぞれ接種の回数が異なりますので、お住まいの市区町村、保健所、あるいはかかりつけの小児科にご相談ください。

四種混合(DPT-IPV)ワクチン、Hibワクチンや B型肝炎ワクチンとの同時接種は、医師が特に必要と認めた場合、保護者の同意のもとに接種可能です。

接種部位の紅斑(発赤)
67.8～74.4%
腫脹(はれ)
47.2～57.1%

発熱(37.5°C以上)
25.0～32.0%

（出典：平成25年度予防接種健康状況調査集計報告書）

内容に関するお問い合わせは、国立感染症研究所 感染症疫学センター第三室（予防接種室）まで。